

付 章 ラーマクリシュナの愛唱歌

ラーマクリシュナはたいそう歌が好きで、話している間にも興がのればすぐ唱い出した。その声は甘美で、節まわしは絶妙——音楽の神も裸足で逃げだすような歌声に、なみいる人びとはみな魅了された。自らうたうほか、傍の人にうたわせたり、皆と共に大合唱になったりする。夢中になって踊り出し、人びとは彼をかこんで輪になって歌いながら踊る……。

『不滅の言葉』は、笑いと歌にあふれている、といつてよいほどである。宗教詩人のラームプラサード作詩でもあるが、作者不詳が多い。ざれ歌や恋歌のようにみえても、実に深い宗教的、哲学的な意味をもっている。ラーマクリシュナは歌を聞かせたり、たとえ話をしては、皆にその意味を説明してくれるのが常だった。

ここに、その一部を紹介しよう。

カーリー讃歌

ラーマクリシュナは、宇宙の大原理＝根元を、静＝不動とみるときブラフマンと称び、動＝変化活動するとみるとき（創造、維持、破壊）、それを根元造化力と称ぶ、と説明している。

このアデヤシャクティを神格化したのが、カーリー女神・大実母^マカーリーである（カーリーは黒^クの意）。

さあ、行こう！ 私の心よ

すべての願いが叶うという

カーリー、カルタパルの樹の根元に

行つて生命^{いのち}の四つの実を摘もう

（そばに行つて頼めば、何でも叶えてくれるという伝説の常緑樹に、カーリーをたとえている）

欲^クと無欲^クの二人の妻は

無欲^クの方を つれて行き

識別^{ヅクニカ}という名の その息子に

真理の道を 尋ねよう

はじめ（欲）の妻の子供らは

遠くにはなして 説き伏せよう

それでも ききわけ ないときは
智の海原うなほらに 沈めよう

浄じやうと 不浄ふじやうの二人の妻と
楽しく いっしょに寝るのは いつか
張りあう二人が 仲よくなれば
大実母ママカーリーが 顔出し笑う

善と悪 二匹の雌山羊は
無意味むいの杭くいに 結びつけ
それでも メーメーさわぐなら
智慧の剣で 斬り捨てよ

虚栄の父と 無智の母
おまえの家から 出て行かせ
愚痴の洞穴ほらにひきこまれるな

忍耐の柱にすがりつけ

ブラサードは言う——このようにすれば（宗教詩人ラームブラサード）

カーリーのもとに報告書がとどき

愛しい御方（神）に えらばれて

こよなき勝友と 呼ばれよう

ラーマクリシュナ「心が無欲、無執着になれば、識別力がでてくる。そうすると、真理を探したくなる。するとカーリーという全能の樹の根もとに行きたくなる。その樹の下、つまり、神のところに行けば、四つの実が手に入る。簡単につみとれるんだよ、正義と、富と、愛情と、自由が。——あの御方（神）をつかめば、世間で暮らすに必要なものも皆、手に入るんだよ、もし望めばね」

カーリーの性と相を 知るは誰ぞ——

六派の哲学 はるかに及ばず……

その子宮に全宇宙をはらみ

その意志が宇宙の法則となる

大いなるものの性と相を

知り得るは唯ひとり 大時クマヘイカウラのみ……（絶対神シヴァ）

大海を泳ぎ渡らんとして力つき

ただよえる人を見てブラサードは笑う

月を捕えんとして手をのばす

小児の愚を くりかえすなかれ、と——

ラーマクリシュナ「無限の神が人間の頭で理解できるわけがない。神の意志——無限の文章が人間に読めるわけがない。枝や葉の数を勘定しているうちに日が暮れてしまう。早く美味しいマンゴーの実を食べる。人間にできること、するべきことは唯一つ——神を慕い、神を愛することだ。神に近づこうと努力することだ」

ラーマクリシュナ「あの御方は、遊ぶこととフザけることが大好きな女神なんだよ！ この世は、あの御方のリーラ（遊戯、スポーツ）なんだ。何でも自分の思う通りにして、あの御方の意志が宇宙の法則なんだ。そして、いつも歓喜よろこびに満ちあふれている。十万人に一人くらいを解放（解脱）して下さる……」

この世の海に漕ぎだした私の小舟は
大実母よ、今にも沈みそうです！

迷妄の嵐は烈しく 無智の霧はたちこめ
マーよ、心細さはつのるばかり……

心 という名の舵取りは下手で

感情 という名の漕ぎ手は頑固

死にもの狂いに気はあせっても

ただアプアプともがくばかり

愛情 の舵柄は見るかげもなく壊れ

自信 の白帆はズタズタに裂け

私の舟はもう転覆してしまいそう

マーよ、どうしたらいいでしょう?!

なすすべもない今となっては

なりふりかまわずハダカになつて

聖なるドルガの御名の筏を（ドルガいかなだ＝大実母の一名）

しっかりとつかんで波間を泳ごう

ラーマクリシュナ「ク私トと私のものク——この考えを無智という。私の名誉。私の財産。私の家族。——これが迷妄マヤだ。家も財産も家族も友人も、すべては神のもの。私のものは一つも無い——これが悟り」

我執のあるうちは真の自由はない。

我執のあるうちは苦惱くるしみは絶えない。

カーリー母さま 玩具おもちゃを作り

シャーママ母さま 玩具を作り（シャーマ＝カーリーの愛称。やはり黒色の意）

五尺あまりの 玩具のなかで
ゆかいな遊びを してみせる

あなたは玩具の なかにいて

たくみな糸で あやつるが

玩具はそれを 知らないで

自分で動くと思っている

玩具がそれを 知ったとき

もうそのときは 玩具じゃない

信仰の糸で 母さまの

シャーマをさえも 縛ります

ラーマクリシュナがくりかえし言っていることだが、神は、立派な殿堂や高価な宝石や、莫大な寄付金おかねを供えても喜ばない。そういうもので神の心を動かすことはできない。そんなものは人間にとって貴重かもしれないが、神にとっては土塊つちくれと同じ。

神が喜んで受けて下さるのは、信仰心である。それも純粹なほど喜ぶが、はじめのうち（精神が幼いうち）は欲があってもかまわない。熱心にかけていれば次第に清まってくる。だいじなのは形ではない。神を求め、慕い、愛し、恋する心である。

わが心 黒蜂のごとく

シャーマの青き蓮華に魅せられぬ

この世の花 いろ美しく

甘くとも 空むなし うとまし……

日本では習慣的に、死んだ人を「ホトケになった」などと言うが、本当にホトケになる——つまり、解脱する＝真の自由を得る、救われることは、肉体の有無に関係はない。西洋的、または現代的な考え方からすると、まことに抵抗を感じずる言葉なのだが、それは、「私」を捨てる——以外にはない。

いつの日、私は救われる？

それ その「私」の消えたとき

ところが、「私」はいく千べん追い出しても、いつのまにか戻ってくる。だからラーマクリシュナは、このナラズ者を、神様に雇ってもらえ、と言う。神の召使い。または神に心を捧げた信仰者としての「私」なら、よろしい。全権委任状を書いて、神様に差し出して、身も心もあずけてしまえ、と言うのである。それが、即身解脱者（即身解脱者）（肉体を持ったままでも解脱した人のこと）になる道である。そうなれば、悩みに満ちた、何一つ頼りにならない、空しくはかない現象世界（この世、あの世といっている相対世界）は——。

この世は楽しい 運動場
わたしは 食べたり 飲んだりしながら
愉快に ゲームを やっているよ……

信仰の浅きをなげく人は、もつと深い信仰を求めて、もつと清い信仰を求めて神に祈れ。
現世利益などという玩具のようなものを求めずに――。神への信仰（愛）ほど強いものはない。
これほど確実なものはない。

深く想えば 愛は生まれ
愛ふかきほど源みなもとふかく
つかみて 信は ゆるぎなし
大実母おんははの御足もと 甘露の海に
わが心 つねに浸りてあれば
礼拝、護摩、供物、すべて用なし

ヴィシユヌ（ハリ） 讃歌

全一神イシユワラの作用を、かりに三つに分けて、宇宙の創造活動を神格化して、ブラマーと呼び、破壊活動を神格化したのが、シヴァ神である。そして、維持保存のはたらきを受けもつのが、ヴィシユヌ神である。またの名を、ハリ、ナラヤナとも呼ぶ。

ヴィシユヌは、その時代や場所に依じて、人びとを真理に導き世を救うために地上に化身してくる。これをアヴァタラといい、釈尊もこのアヴァタラの一人とされている。ヒンドゥー教の聖典、バガヴァッド・ギーターでは、解脱への道の一つとして、ヴィシユヌ神に対する献身的な信仰を説いている。ギーターは、ヴィシユヌ神の化身であるクリシユナと、弟子のアルジュナとの問答によって構成されている。神に対する熱烈な愛——信仰をバクテイといい、これによって神の恵みをうけて解脱する道——バクテイ・ヨーガが、現在のインドでは最も一般的な宗教思想となっているようである。『不滅の言葉』コタムリトにも、実に多くのハリ・クリシユナ讃歌が唱われている。

さあ、ビーナ（弦楽器の一種）に合わせてハリ、ハリと称えよう！
めでたいハリの御足に祝福されなくて

どうして至上の真理を悟ることができよう

ハリの名に悲しみは消え去り

口からほとばしる ハレ・クリシュナ・ハレ！

ハリのお恵みがありさえすれば

もう何の心配も苦しみもありはしない……

◇

◇

心を捧げてハリの名となえよ

ハリの名となえよ ハリの名となえよ

ハリ、ハリ、ハリ、ととなえつつ

この世の海を越えゆけよ

ハリは地の中 水の中

ハリは火の中 風の中

ハリは太陽の中 月の中

ハリ永遠とこしえに ましまして

無限の宇宙に 満ちたもう

◇

◇

主の御名をうたえよ 命つきるまで

まばゆき光は 全世界にあまねく

愛の蜜と乳ながれて諸もろびと歓喜す

主のやさしさ思えば身はふるえ言葉もなし

主の恵みに悲しみすべて一瞬に消え失す

◇

◇

ハリよ、わが主、ハリよ！

人の一生は それそのままに

まわり燈籠とうろうに うつる影

あなたの意のまま動くなら

神の国にも行こうもの……

肉体の道具は あなたで動き

魂の車は あなたで進む

犯した罪に 苦しむ人は

自由があると思つた報い……

あなたは すべての根よ源よ

いのちの いのち 心の あるじ

あなたの徳と 恵みによつて

悪人も聖者になろうもの……

◇

◇

清浄なるハリを想えば

わが心 甘くとろけて

光まぶしく 美しき姿に

わが魂は すいよせられぬ

永久とわに若わかき　その顔かほ容はせに

百万ひゃくまんの月つきも恥はづじらうばかり

電光いんくわんとかがやく光ひかりに

身みはふるえ　髪かみはさかだつ

胸むねに咲さく　蓮華れんげの花はなに（心臓部しんざうぶにある靈中れいちゆう枢しゆのアナハタ・チャクラのこと）

主まハリの　御足ごあしいたゞき

安やすらけく　愛あいの眼まなこをもて

超意識さういしきの海うみに　浸ひたり　泳およがむ

◇

◇

超意識さういしきの海うみに　愛あいの波なみたちて

大おほいなる歡喜くわんぎ、甘露かんろしたたる遊戯りゆうぎの

美うつくしさ　たとえんかたなし！

いと深ふかきヨーガに全ぜんては一いつとなり

時間じかんと空間くうかんの壁かべあとかたもなし

今ここに喜び勇みて両手をあげ
わが心よ、いざ、ハリの名をうたえ！

讚神歌のほかにも、瞑想をすすめる歌や、ヨーガに関する歌も数多くある。
外に向かつて、現象の変化に右往左往している「心」を、集めて内に向ける——瞑想は霊的
進歩のために欠かすことのできないものである。

心よ——

いざ、自らの住処すみかに行こう

この世は外国とくこ——異国の装いして

何故 あてどなく さまよい歩くのか……

◇ ◇

心よ君は耕す術すべを知れ

人間という名の未墾の土地を

耕せば 限りなく豊かに

黄金^{こがね}なす　みのりを獲るべし

◇

◇

沈め　沈め　沈め

美しき海に　わが心よ

深き底に　行きて探せば

聖愛^{あい}の宝玉^{たま}　汝^なが手に入らん

探せ　探せ　探せ

汝^なが胸に　神のふるさと

ともせ　ともせ　ともせ

智慧^ひの灯^ひを　いつも明るく

◇

◇

一なる原初^{プルシヤ}清浄の精神^{シヤ}に

汝、心を深く集中せよ

すべての原因の そのまた原因

生命の相として全宇宙に遍く

活々と光り輝く一切の根元に――

信ある人はその目で明らかに見るべし

人間の体には、背骨に沿って七つの霊的中心がある。一番下の、尾骶骨のあたりにあるムラダーラ・チャクラには、クンダリニーとよぶ霊的エネルギーが、蛇のようにトグロをまいて眠っている。信仰や、瞑想などの修行によって目覚めたクンダリニーは、丹田（スワディスターナ）、へそ（マニプーラ）、心臓（アナハタ）、喉（ヴィシュクタ）、眉間（アジナー）のチャクラに次つぎと上昇し、ついに頭頂にあるサハスラーラ・チャクラに達する。すると人は三昧に入る。これが大悟の境地である。

目覚めよ、目覚めよ、生命の女神

ムラダーラに長く眠れるクンダリニーよ

頂上に昇るのが おんみの義務

主なるシヴァのもと 千弁の蓮座に（サハスラーラ・チャクラには千弁の蓮の座に絶対神シヴァが居る）

六つの階段きざはしを通り 悲苦すべて消し去り

かの靈妙壯麗なる至上の意識に――

クンダリニーが目覚めない――つまり、靈的に目覚めないうちは、人間は種族保存本能と個体保存本能（性欲と物欲）のおもむくままに、無明の森のなかを、どうどうめぐりしながら這いずりまわっているのだ。ラーマクリシュナは、「靈的に目覚めてこそ、真の人間だ」と言っている。そして、地面（動物的生活）を離れて、上（神）に向かつてどこまでも前進しろ、とくりかえし語り続けた。

ヨーガとは本来、明日滅びるかもしれない肉体のための健康法でも美容法でもなく、神人合一、梵我一如の境地のこと、また、そこへ到る道のことをいう。その行者をヨーギと呼ぶ。釈迦もラーマクリシュナも、偉大なるヨーギなのである。

聖愛あいの山の 洞穴ほらに

われ ヨーギとなりて住み

歓喜よろこびの 泉いづみの ほとり

深きヨーガの 瞑想おぼいに入る

真理の木の実を たべて
智慧の飢えを 満たし
離欲の花を ささげて
主なる神の御足を拝す
思こころいは高く 峰の白雪
清き御足の 甘露をのみて
笑い 泣き 踊り 歌う